

# 取材のお願い

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。

この度、名古屋市千種区の古川美術館では、古川美術館・分館 爲三郎記念館の両館において、「長谷川喜久日本画展 色一色彩」を開催致します。

古川美術館では「感情の記憶」、分館 爲三郎記念館では「空間の記憶」として、長谷川喜久の魅力之余すところなくご紹介いたします。

つきましては是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。

特別展

長谷川喜久日本画展

色一色彩

感情の記憶

空間の記憶

特別展  
長谷川喜久  
日本画展  
色一色彩～感情の記憶  
古川美術館

分館  
爲三郎記念館

古川美術館・分館 爲三郎記念館  
両館同時公開

上:「長谷川喜久の日本画」、下:「春の山」

Color-shy (制作)

会期：6月14日（土）～7月21日（月・祝）

## 【お問い合わせ】

公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 爲三郎記念館

電話 052-763-1991 F A X 052-763-1994(学芸課)

〒464-0066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地

担当学芸員 山内 綾子 (a\_yamauchi@furukawa-museum.or.jp)

長谷川は1964年に岐阜県に生まれます。その後、金沢美術工芸大学・同大学院と進み、大学院修了後、すぐに日本画家 岩澤重夫に師事します。そこで研鑽を積み、**20代から30代にかけての人物作品は自己の内面を追求し、社会への不安や葛藤を投影した人物画**を描きます。その後、徹底した写生を基礎とした風景や花鳥画でメキメキと頭角を現し、数多くの賞を受賞していく中、1999年 第31回日展で特選を受賞（2001年にも同受賞）します。その後も個展や様々な展覧会で、精力的に作品発表を続けています。

美術館では「～感情の記憶」として、彼の最初期の人物画作品から、花鳥画から抽象を経て、近年精力的に取り組んでいる「Forms (フォームズ)」「Colors」シリーズという風景画、加えて本展のための描きたい最新作までを展示し、長谷川の画歴を余すことなく展覧します。

長谷川は、明治以降に“日本画”という言葉が生まれる以前からの 日本の絵画の流れを意識しつつ、“日本画”というジャンルの中での自身の立ち位置を模索・挑戦し続ける画家です。美術館ではこれまでの長谷川の作風の変遷を余すところなく触れることができます。

【第1展示室】



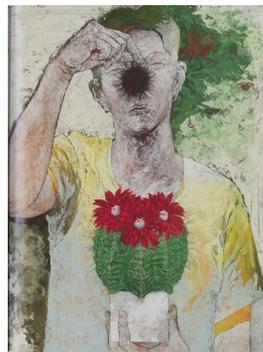
「coin laundry」2001年



「犬園」



「標本」



「棘」2005年



「pudding」

今回は特別に長谷川が24才の頃に描いた作品「酔客」（画像なし）を展示します。本作は長谷川の原点ともいえる作品です。そして、「coin laundry」2001年などの作品は、自身や自身を取り巻く社会や環境を深く洞察し、風刺的な表現をした作品であり、長谷川の画業初期を代表する作品です。

2000年代初頭から見られた大型で風刺的な人物画から、その表現は変化を見せ始めます。人物を取りまく空間から、より人物そのものへと視点がクローズアップされ、“人”という存在がどう生きているか、周りとの関わりなど、より内面的な要素を強く表現するようになっていきます。

それらが「標本」「棘」などの作品です。人物表現でもう一つ、女性を描いたものがありますが、女性像は長谷川にとって感情を造形の中に落とし込みやすいもののようで、色彩も男性像に比べてポップです。

【第2展示室】

長谷川の風景画は近年の日展、個展で展開されますが、それぞれで表現方法や挑戦内容が異なっているのが特徴です。日展では日本の四季や空間の温度や、湿度までも感じられるようなモチーフを選び、風景としての情感、リアリティーを前面に押し出した作品を発表しています。一方個展では、日本画の伝統性を継承しつつ、形や空間に対する認識の再構築、素材を加味することで生まれる革新性が見られます。「日本画とは何か」との問いにさまざまな形で取り組んできた長谷川の、今現在の立ち位置を知ることが出来る作品をシリーズで発表しています。



「流・白く」 2021年（日展出品作）



「滲染の紅」 日春展出品作



「snow white」

**Forms (フォームズ) シリーズ「snow white」**は、「かたち」に対する東洋的な意識と意味を再構築したもので、描く物に対する視点を変えて描かれています。技法としては、緑や赤などが複雑に入り混じり全体の印象としては黒っぽい色面となる和紙上に、白色で空間を描き出していきます。通常風景を描く場合、描かれるのは樹々や山ですが、Formsシリーズでは、樹々や山以外の空間部分を白で描くことで、結果として本来のモチーフである樹々や山が描き残されています。対象物である樹々や山と、対物以外の余白（何も描かれない空間）の意味合いが逆転することによって、画面上でその二つが同等となり、東洋画における「虚と実」を表わす「留白」の思想を継承するものとなっているといえます。

**Colors(カラーズ)シリーズ**は、風景と対峙した時の第一印象をより明確に打ち出す手段として、色彩を用いているシリーズ。とても色鮮やかな作品となっている。



「colors-yhy」

彩度の高い色幅を多用することで、より鮮やかに、より強いコントラストを感じさせます。これは日本画材（岩絵の具）が本来持っている発色の明瞭さや、鉱物質の強さを前面に押し出すことで、色彩についての原点回帰をしながら、現代の日本画の在り方を問う作品となっています。

# 展示内容

## 特別展 長谷川喜久日本画展 ～空間の記憶～

分館 爲三郎記念館

昭和初期の数寄屋建築である記念館には、屏風や軸など日本伝統の表具形式を取りつつ、作品の表現だけでなく、その展示方法も“日本画の今”を示す長谷川の意欲作が並びます。

長谷川の描く「龍シーズ」や、鮮明な色合いの花鳥画は、技法的には伝統的な表現をしながらも、全体で受ける印象は“現代的”です。特に、岩絵の具の鮮やかな色彩や、金色がもたらす華やかさだけでなく、巧みに配された墨が抑えた情念のようなものを感じさせます。ただ美しいだけではない、“新しい花鳥の姿”ともいえます。

また、伝統的日本画材ではない画材を使っての作品なども制作中で、それらを使ったインスタレーション展示も計画中です。それらの作品は美術館とは異なる世界感で観るものを魅了することでしょう。



「富嶽図」



「紅白牡丹図屏風」



「春に啼きたい」



「双龍図」

今回の個展はホワイトキューブの美術館と、昭和初期創建の数寄屋造りの分館 爲三郎記念館という、趣の全く異なる展示空間での展示となります。

展示の場が異なることで、長谷川喜久の魅力を多角的に体感できる内容となっております。

**これまでの長谷川喜久の表現、これからの長谷川喜久を是非ご覧ください。**

# 広報用画像

ご希望の画像番号をお知らせください。  
メールにてお送りいたします。

担当学芸員 山内 綾子（広報兼務）

Mail: a\_yamauchi@furukawa-museum.or.jp

☎ 052-763-1991 Fax 052-763-1994(学芸課)

## ●美術館

①



「colors-yhy」

②



「犬圈」

③



「coin laundry」 2001年

## ●分館爲三郎記念館

④



「富嶽図」

⑤



「紅白牡丹図屏風」